

カラー版歳時記

冬の草木譜

選句・監修／楠本憲吉 解説／松田 修



楠本憲吉（くすもと・けんきち） 1922年大阪に生まれる。慶応義塾大学法学部卒業。在学中から句作を始め、日野草城の教えを受け「青玄」同人となる。現在は俳誌『野の会』を主宰。句集に『隠花植物』『孤客』『楠本憲吉集』などがあり、評論集に『近代俳句の成立』『石田波郷』『戦後の俳句』『俳句入門』『俳句上達法』などがある。現住所は東京都目黒区緑が丘1-17-22

松田 修（まつだ・おさむ） 1903年山形県に生まれる。東京大学農学部卒業。現在は社団法人「日本植物友の会」副会長、兼同会事務局長。専攻は植物文化史。著書に『万葉植物新考』『植物世相史』『花の文化史』『万葉の花』『源氏の花』『花と文学』『植物の旅』『植物と伝説』『花ごよみ』など多数。現住所は東京都世田谷区砧2-7-12

カラー版歳時記

冬の草木譜

昭和五十六年十一月五日発行

発行人 石原明太郎

発行所 (株)国際情報社

発売 (有)光 書 房

〒150 東京都渋谷区東一―二八―六

電話〇三(四〇七)六一四六

振替東京 五―三六五四八

印刷 国光印刷(株)

定価 一六〇〇円

© KOKUSAI JOHO SHA 1981

Printed in Japan

ISBN4-89322-132-9

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

カラー版歳時記

冬の草木譜

選句・監修／楠本憲吉
解説／松田修

国際情報社

冬の草木譜

目次

ポインセチア	カトレア	銀杏落葉	朴落葉	柿落葉	朽葉	落葉	枯葉	帰花	紅葉散る	冬紅葉	大根	葱	柊の花	石路の花	茶の花	八手の花	山茶花
27	27	24	24	23	22	21	19	18	17	16	14	13	12	11	10	9	6
冬蔦	枇杷の花	枯芒	枯芝	枯蓮	枯芭蕉	枯葦	枯菊	枯草	枯桑	霜枯	枯柳	枯茨	枯芙蓉	枯山吹	寒林	枯木	冬木立
49	49	46	46	45	44	43	42	41	38	37	35	34	33	32	31	30	28
冬牡丹	千両	青木の実	寒菊	冬菫	藪柑子	甘蔗の花	冬苺	枯野	深山樺	蜜柑	樹氷	雪折	寒葵	蛇の髯の実	南天の実	冬草	冬枯
69	68	67	66	65	64	62	62	61	59	59	57	56	55	54	52	51	
冬珊瑚	冬菜	冬椿	蠟梅	早梅	冬蕨	侘助	寒木瓜	冬の梅	冬薔薇	寒独活	寒萱	冬木の桜	冬芽	冬桜	万両	室咲	水仙
92	92	91	89	88	87	87	84	82	80	80	79	76	75	73	73	70	

花野菜	94	榎	101	白菜	109	名の木枯る	112
燕菁	95	榎	102	セロリ	110	寒芒	114
麦の芽	96	福寿草	102	寒竹の子	110	冬萌	114
ねずみもちの実	96	若菜	104	木の葉	111	枯葎	113
葉牡丹	98	齒朶	108	冬木	111	枯萩	113
橙	100	胡蘿蔔	109	名の草枯る	112		

例句を選んで	4
花の名句鑑賞 (下)	115
七草の民俗	121
冬の雑木林に立って	128
植物の名前 (三) 古名と雅名	135
索引	143

写真／富成忠夫 木原浩 本目哲郎 川村光章 姉崎一馬 熊田達夫
 内海薫 関谷宗次 垣内直介 デンディ・フォト サンエイ・フォト・ライブラリー
 国際フォト・プレス・サービス
 文中カット／垣内玉笙

例句を選んで

まず現行歳時記に掲出されている例句は全部目を通し、それらの一覧表を作り、参考にさせていだいた。

例句は古典から現代に至るまで、この一句と思われる名句、ぜひ暗誦してほしい佳句を選んだ。

また出来るだけ類題句も選ぶようにした。

たとえば「ポインセチア」の季題の類題である「猩々木」からも一句を選ぶという風に。

また表記も原句通りに採用した。たとえば「いちよう」「いてふ」といった具合に――。

なかには例句の乏しい季題もあって、規定数取り揃えるのに極めて苦心をした。

例句というのは作句上の模範であり、指針である。

従って、季題を配合する位置もなるべく変化をもたせるよう、意を尽したつもりである。特に古典の有名句や有名俳人の著名句は逃さないつもりで選んだが、新人や無名の作者の句でも、これはとおぼしき句はかなり登用させていだいたはずである。

今回の作業で私自身が最も価値ある勉強をさせていだいたと思っている。

拙句の登用はどうかと思ったが、やはり、評価のよかった句、自分でも自信のある句は登用させていだいた。

春の巻にはじまったこの作業も、ここに冬の巻を出して無事終える運びとなった。

大方のご叱正を待ちたいと思う。

楠本憲吉

はじめに

●花を対象とした、このカラー版歳時記は春・夏・秋・冬の四季別に編成されており、本書はその冬の部です。季題の収録範囲は、ほぼ立冬（十一月七日）から立春（二月四日）のころまでとし、各季題は、これなるべく季節順に配列するようにしました。

●各季題には、右側に新仮名をふり、新仮名と旧仮名が異なるものは、左側に旧仮名をふりました。解説文は新字新仮名。例句も新字としましたが、仮名づかいは原作のままにしました。

●季題は本題の下に、それぞれ句作の参考となる異称・別名・別字をのせ、あわせてその季題の活用形・応用形をものせることにしました。

●歳時記には、春の部、夏の部、秋の部、冬の部のほかに新年の部というのがあります。新年の部に属する季題は文字通り新年に関するものです。冬は植物が活動を停止する季節であり、花の数も少なく、したがって、植物に関する冬の季語が他の季節にくらべて少ないのは当然といえます。そこで本巻では新年の部を含めることで一冊としました。一〇〇頁の「橙」から一〇八頁の「歯菜」までが、新年の部に属する季題となっています。

●本シリーズは、季題・例句・植物解説・カラー写真によって構成されています。例句は、作句上の模範になり指針になるようにと、とくに留意されて選ばれておりますが、美しいカラー写真と解説文だけをとり、本書は植物愛好家の座右の書になりうることでしよう。



冬の草木譜





山茶花

茶梅 姫椿

山茶花や時雨の亭の片びさし

霜を掃き山茶花を掃く許りかな

石のころもに山茶花散りぬ地藏尊

山茶花や金箔しづむ輪島塗

山茶花に月さし遠く風の音

宴のはて山茶花を嗅ぎゆきし人

旅の山茶花三日遊べば三日散る

言水

高浜虚子

中 勘助

水原秋桜子

加藤楸邨

佐藤鬼房

楠本憲吉

《サザンカ》

サザンカ(ツバキ科)は、漢名の茶梅が正しいが、日本では誤って山茶花を慣用している。中国の漢名、山茶はツバキを指す。

日本の初冬をかざる花で、この頃になると庭では「冬に入る庭かげにして山茶花の 花動かしてゐる小鳥あり」(中村憲吉)などという姿が見られるし、海沿いでは「冬近き海沿い小村 一筋の埃の往還に 人家なく家居のさまは 静もりて障子の白く 山茶花の葩のみ 赤し」(城左門)といった光景を呈する。初冬に咲く花だけに、この花にはどこか、わびしさと清らかさと静かさがある。

このサザンカは、日本の世界に誇る花で、暖国の四国や九州辺の山地には自生もあるが、広く庭木として植えられ、盆栽や切花として観賞されている。しかし花の観賞はツバキよりおそく、これが日本の花木として注目されるようになったのは徳川以降のことで、徳川の中期にこれが園芸品として改良され、多くの品種が生れ、今ではその品種も百五十余种を数え、その花の咲き方にも花色にも、一重、八重、絞り、淡紅、濃紅、白といういろいろある。

常緑の小高木で、ツバキは春咲なのに対してサザンカは冬季に咲き、その花も葉も小さめで姫椿の名があるし、またこの小枝や葉に細毛があるのでツバキと異なる点である。花後の果実は球形で、この果実の種子から油をとる。ツバキ油と同じ用途に用いるが、サザンカ油は不乾性油で、粘着性がなく、また酸化物を生じないので、刀剣や刃物の防錆剤として賞用される。







やつで 八手の花

花八手 天狗の羽団扇

八ツ手咲け若き妻ある愉しさに

中村草田男

友娶り然も在らぬか花八ツ手

石田波郷

花八ツ手まぢかき星のよく光る

石橋秀野

玄関へ出て雨見るや花八ツ手

野村喜舟

身を落し狂者守する花八ツ手

平畑静塔

花八ツ手日雇昼飯の刻違ふ

岩田昌寿

花八ツ手みどり児の眼はまばたかぬ

藤田湘子

母屋売りて離住居や花八ツ手

大橋箒述

夜をこめて鬼になりたい花八ツ手

大島得志

路地奥のうすき陽ざしや花八ツ手

中沢照子

八ツ手咲き蛇来て吾は素直なる

いさ桜子

釘を打つ音のひびきや花八ツ手

吉野夏子

八ツ手の葉ジャンケンしてるパーを出す

吉野秀彦

花八ツ手薄き乳房は嘆くべし

楠本憲吉

《ヤツデの花》

島木赤彦の歌に「窓の外に白き八手の花咲きて ころろ寂しき冬は来にけり」という歌があるが、ヤツデの花は冬の近づきを知らせる花である。

このヤツデ(ウコギ科)は、日本の特産で、九州、小笠原辺の暖地近海の海岸山林地帯に自生が見られるが、今は広く庭木として植えられている常緑の低木で、葉が大形で掌状、長い葉柄をそなえ、葉が八中裂しているので八手の名が出たといわれるが、これは八中裂とは限らず、実際は七、九中裂している。葉が大きく、あたかも羽団扇のような形をしているのでテングノハウチワなどという称呼もある。学名を *Fatsia japonica* というが、ファチア(ヤツデ属)は、この八手に基づいた名である。外人には日本語のハチがファチアと聞えたのであろう。

花は初冬にかけて梢上に花茎を出し、黄白色の五弁の花を花穂をなして簇生する。この白い花のかたまりを見てみると、まさに「八ツ手咲きゆくさきざきのこの寒さ」(加藤かけい)といった思いである。液果は翌年の五月頃に黒味をおびた果実となるが、この果実を持ちはじめると、側生の新芽が伸びはじめ。民間ではこの葉を浴場に用いてリュウマチスによく効くといって利用する。



茶ちやの花

茶の花におのれ生れし日なりけり

久保田万太郎

茶の花やアトリエ占むる一家族

石田波郷

はるかなこゑ「茶の花がもう咲いてます」

加藤楸邨

茶が咲けり寂しさに土つぶやくも

馬場移公子

茶の花や寺領は枯るるもの枯れて

山川青郊

茶の花やけなげに咲きぬ虫くひても

岡山よし江

《チャの花》

チャの花は晩秋から初冬を飾る花で、これが初冬の陽をあびて静かに白々と咲いている姿はいかにも美しく、初冬の景といつてよい。

このチャ（ツバキ科）は、もと中国産で、日本への最初の渡来は奈良朝の聖武天皇の時代といわれているが、一般的になったのは、建久二年（一一九一）、僧栄西が宋から持ち帰ってからという。常緑の低木で、花は白色の五弁、中心に黄の蕊があらわれて美しく、花は下向きに咲いて芳香がある。

つわ
は 石路の花 藁吾の花 石路 いしぶき

茎高くほうけし石路にたもとほり

杉田久女

花つはや障子を明けて咳きぬ

石橋忍月

石路隠れ籬隠れに誰々ぞ

中村汀女

つはぶきはだんまりの花嫌ひな花

三橋鷹女

石路咲ける厨さらして海女の留守

白倉由美子

スランプやつわぶきはつと瞳をひらく

楠本憲吉

《ツワブキの花》

ツワブキ(キク科)は略してツワの花などともいわれる。日本の特産で、本州の中南部から九州にかけての海浜地に野生が見られるが、観賞用として庭にも多く植えられている。常緑の円形の葉を根元から叢生し、質厚く、光沢があるので、ツワブキの名はこの光沢のあるツヤブキから出ている。花はこの光沢のある葉の間から花梗をぬいて黄金色の花を開く。蕪村の「咲くべくも思はであるを」といった感じである。品種に大形のトウツワブキなどもある。





ひいらぎ
柎の花

柎の花や空襲警報下

柎の花に何食む神の雞

柎の花から白くこぼれ落つ

母がりや花柎の現はれて

父とありし日の短かさよ花柎

妻が挿せし柎更けし灯に戻る

久保田万太郎

久米三汀

中村草田男

岸田稚魚

野沢節子

的野雄

《ヒイラギの花》

ヒイラギ(モクセイ科)は木偏に冬と書き、従来の歳時記では冬の季題となつてゐるが、実際は九月末から十月にかけての花で、植物学からは秋の季語とみられるが、しかし残花は初冬の頃まで残るものもある。白色の小花である。常緑の低木で、山中にも自生しているが、庭木としても植えられ、葉にトゲがあるのでヒイラギの名は「疼ぐ」から起つたといわれる。しかし老木になるとこの葉にはトゲがない。節分にこの葉にイワシの頭をさす習俗がある。



葱

葱 一文 根深 葉葱

葱白く洗ひたてたる寒さかな
寒風に葱ぬくわれに絃歌やめ
満月に葱折れてより交を絶つ
葱切つて潑刺たる香悪の中
悔など笑止煮溶けて熱きのみ葱
刻むほかなき晩年の葱の量

芭蕉
杉田久女
秋元不死男
加藤楸邨
花田春兆
楠本憲吉

《ネギ》

ネギ（ユリ科）は広く蔬菜として栽培されているもので、古名の葱をキと訓み、異名に、根を土深く作るのでネブカ、葉が中空なのでウツボグサ、葉が円く枝がないのでヒトモジの名がある。種類が多く、根深ネギ、千住ネギは根もとの白い部分が長く、下仁田ネギ、岩槻ネギは太くて味がよく、九条ネギは葉全体が緑で葉ネギともいわれる。十二月から二月末まで収穫したものを俗に冬ネギといい、味が最もよい。春に開花したものを俗にネギ坊主という。

大根

だいこん
蘿蔔

だいこ おおね すずしろ

菊の後大根の外更になし

流れ行く大根の葉の早さかな

大根を刻む刃物の音つゞく

窓が開いてをる大根畑昼深し

ダンサーに買はるしなくと大根

桃色の舌を出しけり大根馬

耳立ちし黒犬坐る大根畑

ぬきん出て夕焼けてゐる大根かな

死にたれば人来て大根焚きはじむ

川霧の向かう大根によきによきと

大根汁朝のサイレンおちこちに

飴色に大根煮えて母癒えむ

何か知ら樂し紅大根をきざみつ、

筒袖の朱を気にしをり大根売

芭蕉

高浜虚子

山口誓子

瀧井孝作

秋元不死男

池内友次郎

中村汀女

中田みづほ

下村槐太

新谷ひろし

岡田正子

原 百合子

森山松女

浦野志与平

《ダイコン》

ダイコン(アブラナ科)は古名をオオネ(古事記)と呼んだ。大根(大きい根)の意味で、後にこれを音読して今のようになつた。春の七草のスズシロもこの大根のことをいう。大根はもとは野生の植物であつたものが、遠い遠い昔から人類の手によつて栽培されて今日のように立派な蔬菜となつたもので、北村四郎博士によると、世界の大根は一系統であつて、はじめ地中海地方に起つて、古く中国に伝わり、日本へは有史以前に大陸から伝わつたものという。蔬菜の栽培種としてはカブラと共に最も古いもので、種類によつて根の形が異なり、練馬、宮重、方領、聖護院、桜島、守口などという大根がある、最も根茎の大きい大根は桜島大根で、最も長い大根が守口大根である。

大根は年中これを作ることができるが、冬のものが最も肥大で、煮物、風呂吹、大根なます、おろし、漬物、沢庵と用途が広い。

この頃はほとんど一年中出まわりますが、しゅんは冬で、これは晩秋から冬に収穫する。大根引き、大根洗う、大根干す、風呂吹などという季語も冬である。



